チェルノブイリの現実

東 浩紀

二〇一三年に初めてウクライナのチェルノブイリを訪れた。一九八六年に原発事故を起こしたあのチェルノブイリである。訪問は原発事故跡地の観光利用を取材するためだったが、豊かな自然にソ連時代の廃墟が沈むSF的な光景の魅力に取り憑かれ、創業した会社「ゲンロン」でスタディツアーを企画することになった。いままで五回開催していて、コロナ禍がなければこの秋も行くはずだった。

二〇一三年と現在ではウクライナの状況はかなり異なっている。二〇一三年の時点では政権は親ロシアで、街中にロシア語が溢れていた。ところがその後、民族主義が台頭した。政権が替わり、ウクライナとロシアはいまや実質的な戦争状態にある。首都キエフの標識からもロシア語は一切消えてしまった。

ゲンロンのツアーは原発事故と復興について学ぶものだ。だから最初は民族主義はツアーの目的に関わらないと感じていた。けれども訪問を重ねるうちに、それは誤りだと思うようになった。

日本人のほとんどは「チェルノブイリ」の名を原発事故で記憶している。けれども、当然のことながら同地には事故以前に長い歴史があった。チェルノブイリを含むポリッシャ地方は、欧州最大の森林地帯だ。スラブ民族の故郷ともいわれる同地は、近代の国境では境界に位置していて、二〇世紀には繰り返し戦禍の犠牲になった。チェルノブイリはかつてユダヤ人の街でもあった。当地にソ連最大の原発が建設された経緯には、そんな「辺境性」が大きな役割を果たしている。そういう前史は民族抜きには語れない。

大きな事件には土地固有の歴史を塗りつぶす効果がある。チェルノブイリの地を被災地としてみれば、そこには被災者しかみえなくなる。けれども、これまた当然のことながら、彼らには被災以外の人生もある。それを発見しなければ、事故の本質はみえない。ゲンロンの「観光」を通して、参加者がそのことに気づいてくれればと考えている。

ここまで「チェルノブイリ」と無造作に記してきた。じつはそれはロシア語での地名であり、ウクライナ語ではチョルノービリという。事故がなければ、この地がいまもロシア語名のまま記憶され続けることはなかった。チェルノブイリを「チェルノブイリ」と呼ぶこと、そこにすでに政治と歴史が入り込んでいる。

プロフィール
1971年東京都生まれ。批評家、作家。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了（学術博士）。ゲンロン取締役。著書に『存在論的、郵便的』（サントリー学芸賞、新潮社）、『動物化するポストモダン』（講談社）、『クォンタム・ファミリーズ』（三島由紀夫賞、新潮社）、『一般意志2・0』（講談社）、『ゲンロン0 観光客の哲学』（毎日出版文化賞、ゲンロン）、『テーマパーク化する地球』『哲学の誤配』（ともにゲンロン）など多数。

月刊 みんぱく

12月号目次

1 エッセイ　千字文
チェルノブイリの現実
東 浩紀

特集　激変する世界と観光の現在

2 動く世界と止まる世界
——ヴァヌアツ、クルーズ船観光の事例とともに
福井 栄二郎

4 ビーチリゾートの観光化と脱観光化
——フィリピン、ボラカイ島の開発と汚染
東 賢太朗

5 かりそめの観光、ゆきずりのシージプシー
鈴木 佑記

6 観光と支援の結節点としての民族文化観光
中村 香子

7 アートツーリズムと創造都市
——フランス、ナント市の芸術祭と地域振興
越智 郁乃

8 神になる旧日本軍人、それを訪ねる日本人
藤野 陽平

9 止まらなかった世界のいくつもの片隅に
——精神的移動から考えるこれからの観光
岡本 健

10 〇〇してみました世界のフィールド
アンデス山中に残る古道
渡部 森哉

12 みんぱく Information

14 世界のバスケタリー×バスケタリーの世界
アイヌのテンキとそのひろがり
齋藤 玲子

16 みんぱく回遊
ムスリム女性の装い
藤本 透子

18 シネ倶楽部 M
コロナ時代の民族誌映画祭
川瀬 慈

20 ことばの迷い道
モムサル薬お願いします
諸 昭喜

21 次号予告・編集後記